

戸江哲理著

『和みを紡ぐ ―子育てひろばの会話分析―』

(勁草書房、2018年)

池田曜子

本書は、子育てひろばにおけるフィールドワークにもとづき会話分析から、「子育てひろばの和やかな雰囲気はどのようにして作りだされるのか」を解き明かそうとした力作である。筆者は、大学院生の時に、ボランティアスタッフとして子育てひろばへ通い始め、スタッフや母親たちと継続的に良好な関係を結び、現在は理事までつとめている。このように関係を変化させながらも、密接な関係を保ち続けており、現在は、新たに学生を連れて訪れることもあるという。

昨今、子育てについて、少子化や待機児童の問題に加え、児童虐待から死に至ってしまうというセンセーショナルなニュースが立て続けに報道され、子どもと保護者、特に母親に対してどのようなサポートが社会として可能なのか関心が寄せられている。子どもの保護者の状況は多様であるからこそ、万能薬があるとは思えない。だからこそ、様々な視点から子育て中の母親の日常について研究が行われることは、非常に興味深く有益なものとなるはずである。

また、本書で明らかにされている知見は、会話分析という分析方法を用いることで、学問的に寄与するものであるだけでなく、実際の社会生活におけるコミュニケーション行動において参考となる結果も数多く見出されている。

本書の構成は以下のようになっている。各章のタイトルには子育てひろばに対する筆者の関心と思いがよく表れている。

第1章 和みはどんなふうに紡がれるのか

第2章 会話分析：方法として・領域として

第3章 子育てひろばをめぐる問いと会話分析：育児不安・育児ネットワーク・スタッフの専門性

第4章 和みが紡がれるところ：子育てひろばというフィールド

- 第 5 章 やりとりが始まるしくみ (1) : 糸口質問連鎖
- 第 6 章 やりとりが始まるしくみ (2) : 説明促し連鎖
- 第 7 章 悩みを分かち合うしくみと助言のしくみ
- 第 8 章 母親どうしがつながるしくみ
- 第 9 章 しくみを貫く 3 本の糸 : 日常性・道徳性・専門性
- 結語 和みの紡ぎかた

内容については、本書の醍醐味である実際の子育てひろばでのデータをもとにした会話分析に関してを中心に紹介していきたい。だが、その前に第 1 章から第 3 章の内容について簡単にまとめておく。

第 1 章では、本書の学問的位置づけと会話分析におけるデータ記号の意味が説明されている。第 2 章では、会話分析のエスノメソドロジーを背景とした成り立ちがこれまでの先行研究をもとに詳細に紹介されている。第 3 章では、これまで子育てひろばを研究領域としてきた家族社会学の育児不安と育児ネットワークの先行研究がまとめられている。

以上の第 1 章から第 3 章も興味深く、エスノメソドロジーや会話分析をより深く学んでみたいとの気持ちがかきたてられる内容ではあるが、本書の主要テーマは第 4 章以降の子育て広場とその分析部分である。

第 4 章は、子育てひろばと筆者のフィールドについて詳しくまとめられている。子育てひろばは、政府事業としての地域子育てセンターと同種の事業である。このような位置づけとされたきっかけは、子育てひろばの数が急増したことである。筆者は、子育てひろばの社会的位置づけを概観したうえで、活動内容についても 3 軸で整理している。1 軸は、プログラムとしての活動かノンプログラムとしての活動かである。2 軸は、親と子どものどちらに照準を合わせているかである。3 軸は、学習・教育的志向かエンターテインメント志向かである。

筆者のフィールドとしていた子育てひろばは 2 ヶ所あり、立地条件などの違いはあるがどちらもノンプログラム型の活動を中心としている。対象となっている子育てひろばの特徴は、公園での出会いや子育てサークルとは異なり、庭などの屋外だけでなく屋内での快適な環境と、誰にも会えないということがな

い（少なくともスタッフがいる）点である。スタッフは、幼稚園教諭や保育士資格は必要なく、子育て経験者が主となっている。基本理念は、母親に対して指導しないこと、丁寧なサポートを重視することである。利用者は、会社員を夫とする専業主婦が大半を占めている。

データに関しては、2006年から2008年にかけて月2回程度、2009年は月1回程度、筆者自身がボランティアで参加し、ビデオ撮影（全45時間程度）とICレコーダーによる録音を行っている。さらに、9名の母親に対して1時間から2時間のインタビューを実施している。データやインタビュー対象者に関しては、第4章まで読み進めながら予想していたフィールドワーク期間応じた分量に対して少ないことに驚きを感じたことは否めないが、筆者の分析手法がエスノメソドロジーを基礎とした会話分析であることに鑑みるならば、十分なデータであるのかもしれない。

第5章は、子どもや子育てについて気になっている事柄を他の母親に尋ねることから始まる「しくみ」が取り上げられている。子育てひろばへやってくる母親は、他の母親との会話を望んでいる。そのきっかけづくりがスムーズにいく程、子育てひろばは居心地の良い場所となる可能性が高い。

特に、第5章では、子どもの発達や子育ての愚痴、悩みが切り出される手続きについてが詳細に検討されている。手続きに関しては、会話分析における話題の切り出し方、とりわけ質問から話題が開始する手続きが取り上げられており、回答の後で質問者自身が話し始める手続きという点が新たなしくみとして検討されている。換言するならば、最初に質問することで、回答後その話題について質問者が会話を続けやすくなるのである。筆者はこの形式を質問者が自分の話をする「糸口」として用いるのもであるとし、「糸口質問」と名づけ、糸口質問から始まる手続きを「糸口質問連鎖」としている。

子育てひろばにおける糸口質問連鎖を用いた会話は、発達などのデリケートな悩みを語る際に用いられる。これまで行われていた会話をいったん終了させ、糸口としての質問と回答者への褒めや羨みを前触れとすることで、質問者は回答者に悩みを語りやすくなるのである。そして、このような前触れを受けて回答者は悩みの相談だと気づき、自慢とならないように注意しながら回答を行う。一見すると、糸口質問連鎖はより母親の育児不安を増加させているようにも感

じられるが、筆者の解釈では、自分の悩みや愚痴を語るチャンスを作り出すことでストレスを解消し、育児不安を和らげることにつながるとされている。

第6章は、第5章で取り上げられた糸口質問連鎖と反対に回答者に話すチャンスをもたらす手続きであり、子どもの普段の様子についての語りから親という立場が立ち現れてくるものとされている。この手続きは、まず子どもの行動描写から始まり、それに対する周囲の反応と期待に対して、母親または父親がさらに上回る情報や知識を話し出すという形式である。

しかし、この形式は、筆者によって「説明促し連鎖」と名付けられていることからわかるように、質問者によってさらなる説明をするよう促されることで成り立つものである。質問者は回答者に直接疑問形で質問するのではなく、平叙文で状況を描写し限定的な情報しか持たない状態を伝えることで、回答者により詳しい説明や新たな情報を求めるのである。このような説明促し連鎖が生起する条件について、筆者は子どもの成長の様子を描写する場合であるとしている。そして、説明促しに応答することによって、親としてのアイデンティティが立ち現れてくるのだと結論づけている。

一見、糸口質問連鎖と説明促し連鎖は、会話の主導権が話し手（質問者）と受け手（回答者）の双方に与えられている2種類の手続きであるようにみえるが、実際の会話の主導権は常に話し手（質問者）にあるとも考えられる。説明促し連鎖においても、どのような説明をしてほしいかは話し手の描写に表れており、それについて満足いく回答が受け手から得られない場合は、直接的な質問を行う例も挙げられている。さらに、説明促し連鎖は、受け手が自分が親であることを示す情報を開示できれば問題ないが、うまく説明できない場合を念頭においた配慮が必要な会話形式であるように感じられる。

第7章は、子育てひろばの特徴の1つである、子育ての当事者が集まる場所を提供し子育ての悩みが分かち合われることに焦点を当てる。深刻な悩みであっても、和やかな雰囲気の中で笑いながら話すことで、精神的な安定感を保つことができる。そのような和やかな雰囲気はどのようにして作り出されているのが第7章のテーマである。

まず紹介されている事例は、互いに同じ悩みを持つ母親同士のものである。加えて、あからさまな助言ではなく、自分の実践例を助言とすることによって、

受け入れられやすくなる事例が紹介されている。自分の事例を紹介する行為は、受け手側に助言か報告か選択の余地があるため、場の雰囲気を保ちながら子育ての悩みについて語り続けることができるしくみとなっている。

子育てひろばと他の子育て支援との大きな違いは、悩みを解決するのではなく、悩みについて語り続けることと筆者は結論づける。母親たちは問題を語り続けることを望んでいるのであり、その行為自体が日常生活の息抜きを生み出し、ひるがえっては子育てひろばの和やかな雰囲気を作り出すものとなっているのである。そして、このような状態を母親たちが継続できるようにサポートするために求められるのが、子育てひろばのスタッフのスキルなのである。

第8章は、母親どうしがつながるしくみについて分析されている。子育てひろばの主要な活動は、親どうしがつながる場の提供である。第8章では、親しい母親どうしのやりとりと初対面の母親を含むやりとりについてが詳細に分析されている。

まず、親しい母親どうしのやりとりは、その場の関係だけではなく過去に基づいたやり取りが行われる点が特徴的である。さらに、その場の話題についてただ言及するのではなく、一緒にいない時にも互いのことを思い出していることを含ませた発言をすることで、より強力に親しさを伝えることができると筆者は分析している。つぎに、初対面の母親を含むやりとりにおいては、既知の友人が初対面の母親どうしを、子どもを中心とした話題でつなぐ様子が描き出される。さらに、初対面の母親は慎重に自分の経験を語るタイミングをはかっていることも示唆されている。

ところで、筆者は、つながりやネットワークが生み出される場をとらえるためには、会話分析のメソッドが非常に有益であるとしているが、人間関係のあり方を動的にとらえる方法は他の研究分野においても多数蓄積されている。このような多様な視点や分析方法参考とし、共に用いることでさらに深みのある分析が可能となるのではないだろうか。加えて、長期間行われたフィールドワークで得られたデータを一例だけでなく複数例提示することで、筆者の見出したつながりの構造がより明確に現実味を帯びて伝わるのではないだろうか。つながりに関しては、今後さらなる検討が加えられることを期待したい。

第9章は、これまでの章を概観した後、総括として3つの視点から改めて検

討されている。

まず、1つ目は日常性である。本書は子育てひろばにおけるしくみについて分析が行われてきたが、このようなしくみは大学生であっても高齢者の集まりであっても日常的にみられるやりとりのしくみである。よって、子育てひろばを形作っているしくみは、独自のものではなく、どこにでもありふれたものであるとされている。2つ目は道徳性である。子育てひろばの母親どうしの会話では、一見すると不道徳ではないかと思われる助言もある。この不道徳な発言は、一般社会ではどのように受け止められるかを考慮したうえで前置きや笑いなどで予防線が張られており、母親たちも二重の意味で受け止めていることが示唆されている。このような使い分けは、友人関係の親密さや仲間関係の境界線を引くことにも関係するように思われるが、この点に関しても今後のさらなる分析の発展に期待したい。3つめは専門性である。この専門性は、子育てひろばのスタッフに関するものである。子育てひろばは、母親だけで成り立っているわけではない。その関係性をサポートするスタッフがいてこそ成り立つ。そのためには、コミュニケーションの大切さや同じ母親の立場として助言するなど、日々スタッフとして働く中で身につけられたスキルが必要であると分析されている。しかし、本書では母親どうしのやりとりに焦点が当てられており、子育てひろばを構成しているスタッフの分析がほとんどなかったことは非常に残念である。

本書は、子育てひろばにおけるフィールドワークにもとづき、会話分析からその日常をとらえなおすという、とらえどころのない日常を丁寧に切り取り分析された貴重な研究である。だからこそ、会話のしくみの特徴とその利点だけでなく、母親たちの会話の中から生じてくる関係性の問題点について事例と共にきりこんでいくことでさらに深みのある結果が得られるのではないかと期待してしまう。和むだけのつながりはあり得ないのではないかと、子育てひろばを利用しなくなった人はどのようなやり取りをしていたのかなど、読者としては欲が出てきてしまうのである。このように感じてしまうのも、本書が研究を超えた多様内容を含むすばらしいものとなっているからであると思われる。今後の研究成果がさらに期待される。